

晚鐘を聞いて

聞馴し入相の鐘も秋さればつたふる風の音をやかふらん
一、基庸の弟の門出に

十九日。基庸の弟某、今日故郷に道途し待るよし聞待りけるまゝ、とぶらひつかはしけるせうそこの端に。

二つなき心をちぎりに砕きつゝ今朝しもさぞな物思ふらん
一、小瀬助信を悼む

小瀬助信病おもくして、故郷におもむき侍りしが、やうやうに信濃路更科のあたりにいたりて、身まかりけるよし聞侍りて。

更科の里のくさ葉の下露と消はてんとはむすびおかじを
一、幽栖月その他
二十二日。

幽栖月

八重葎かたじきあかす袖の月思ひありやととふ人もなし

郭公

山賤も思ひかけざる一聲におきまどはせるほとゝぎす哉

山家時鳥

雲ふかき高嶺おちこしほとゝぎす今や過らん里の明ぼの

時鳥歸山

深山出てみやまにかへる時鳥いかにさだめし心なるらん

月前紅葉

くれなゐのちしほの衣立山紅葉やうつるつきや色そふ

雨後月

窓うちし雨のつらさも雲霧もひとつに晴るゝ秋の夜の月

荒屋秋來

秋ふけてあれし鶉のとことは誰がためむすぶ露の手枕

二毛を見て

黒髪とみえしや夢の中ならんさめしうつゝの今朝の白糸

時鳥

ほとゝぎす雲路に咽ぶ程なれやつきて鳴なん聲のたゆめる

朝菊

うつろはむ色香思へどよしや先づ日影まつまの露の白菊

水鳥

いかなれば身をうき沈む水鳥のはだれ雪ふる冬の川瀬に

述懐

鴈かへる北の海邊の海士衣袖にぞしたふ和歌のうらなみ

月前蟲

越方の秋おもほへて我ぞきく花のゝ月にすたくむしの音

野月

亂れさく秋の花のゝ夕霧にほのくうつる山の端のつき

月前戀

あはれたゞ月を慕ひてとひ來らしみし心地する花の梢に

一、別館の途中にて

二十六日。別館の路中、雨風に薄など打なびくを見て

雨まぜに風の吹しく初尾花すぎがてにみる袖もさむけき

一、松風亭の記に酬ゆ

貞享二年の頃、於駒込旅館丹直清、撰松風亭記授贈予。又むくゆるにことばを草して遣す。中々無正躰の間、何さまにもと詞を残して、七かへりの冬にいたり、去年所勞の内、件の舊草潤色してしかも又不果。今朝閑暇の間早手に馳筆則遣之。其歌ばかりこゝにします。

かしこさの心もふかきことの葉の花の色香や松に添らん
今はとてたちしむかしの玉琴の思ひしられし夜半の松風

今又紙尾に一語をくはへて、又三首書加之。

露霜のふりにし方のことの葉をさらに忍ぶの岡への松
ことの葉にむすびし露の跡とめて又水莖を染るはかなさ
七とせにふりにしかども今もなほきく心地する宿の松風

關路鶯

逢坂の關の杉むらすぎがてに誰かきくらんうぐひすの聲

寄葛述懐

秋風をうらみなはてぞ葛の葉の霜に朽なん程もやはある

庭前の萩を見て

むさし野の秋のゆかりの色なれやうゑし籬の萩の一もと

一、公子富士社御參詣

二十九日。公子勝次郎君富士社へ御宮參の儀奉祝二首。

君にけふ千とせ萬代菅の根の長きよはひを神やさづけむ
君やまた千とせの秋の後にみむみしめふりにし松の白雪
一、前田利明の遺物

晦日。故飛州君號大機院御遺物兩品來る。一品は號孔老之圖。孔子適周問禮之圖也。狩野故法眼畫。一品は細口花瓶。一、淺井政右の周忌に